

明治29年三陸地震津波

日本海中部地震で100人にのぼる津波の犠牲者を出し、津波の恐ろしさを思い知らされた。地震直後に、津波の来襲状況がテレビで多数放映され、強い印象を受けたことであろう。

明治29年(1896)6月15日の19時30分ごろ、三陸沖に発生した津波は、青森・岩手・宮城県沿岸各地を襲った。溺死者は22,000人にのぼり、日本の津波史上最大の被害を記録した。岩手県の普代・田老・釜石などの地域では、一つの町村で死者が1,000人を超えている。三陸沿岸では広い範囲で10mの波高、最高波は29mにも達し、集落のみ込み、山の中腹まで漁船が押し上げられた。当時の被害写真は多少残っているが、生き残った人たちの証言をもとに描かれた数々の情景が「風俗画報」の増刊号に掲載され、全国にその惨状が伝えられたのである。

この津波には、幾つかの悪条件が重なった。まず津波の前触れの地震であるが、三陸沿岸では震度2~3(軽震~弱震)程度の揺れで、だれも津波の来襲を気づかなかつたらしい。まさに“寝耳に水”の津波であった。地殻が粘弾性的に数十秒かけて破壊する“ヌルヌル地震”であったので、震度は小さいが、断層の変位が大きいマグニチュードM8クラスの巨大地震であった。

津波当日は、旧暦5月5日の端午の節句に当たり、日清戦争の祝賀とも重なり、近郷から親類縁者が浦々の集落に集まり、犠牲者を倍増させた。三陸の浦々には、これら溺死者の氏名を刻んだ供養碑が多数建てられ、当時の大惨事をしのばせている。

津波の数値実験によれば、長さ200kmの波源で平均2m水位が上昇した。この波高が海岸に進むにつれて増し、さらに港湾の固有振動周期と共振し、5~6倍にも増幅したのである。とくにV字型の湾奥の波高が大きかった。

それから37年後、昭和8年3月3日の未明に、再び三陸津波が発生した。明治の津波より規模はやや下回ったが、死者3,000人を数え、岩手県沿岸の集落は土台石ばかり残る河原と化した。この情報が世界各地に伝わり、“Tsunami”という国際語が生まれ、三陸の津波が有名になった。

津波災害は、地形条件などで波高と流速の大小に左右され、河口付近が最も危険度の高い地域である。波高が10mクラスの津波であると、流速は毎秒5mを超え、津波を見てから避難は難しい。最近、木造家屋の構造は基礎がボルトで結合されるなど、かなり強度を増しているが、地上から浸水高が2mを超えると流出するものが出る。一般に、平均海面上4m以下の津波では、海水が盛上がるように陸上にあふれて家屋に浸水するが、そう激しいものではない。やはり、明治・昭和の三陸津波は特異な巨大津波であったといえよう。

むかしから現在まで、全国で死者1,000人以上を出した津波は13回ほど記録されており、地震災害を上回った。しかし、昭和27年に気象庁の津波予報体制が全国的に確立されてから、津波の犠牲者は目立って減少している。津波の大きさは、震度の強弱とは無関係であるから、地震時には津波情報を早く知ることが大切である。

(早稲田大学非常勤講師：羽鳥徳太郎)



「風俗画報」臨時増刊より（岩手県立図書館蔵）

